

ミラーリングプログラム試行と母子の変化について

—プログラム参加に対する母親の感想事例から読み取れる効果—

井 手 裕 子¹⁾

問題と目的

本論は、日常的に母親が行っているミラーリングを、1週間、意識してもらうというプログラムを作成し、母親が意識することによって、子ども、母親にどのような変化がもたらされるのかを、プログラム試行後の感想インタビューから、検討するものである。

ミラーリングは、母親が乳幼児の感情状態を鏡のように映し出す自然の行動である。

Stern (1985) は、母親の日常的に行うミラーリングは、乳児の行動に現れる主観的な状態を言い換え、非言語的な比喩、表情の表現や類似行動によって矯正し、代理するものとして、調律と同義とした。そして、そのような母親の関わりは、乳児が類似性を体験することによって、言語的な象徴の使用へ結びつく言語自己感を発達させると述べた。

鯨岡 (1999a, 1999b) は、母親が離乳食時に思わず子どもと同様の行動をする合体の働きを「成り込み」と述べ、まだ発現していない子どもの行動を引き出す時に、気持ちを重ねるこの「成り込み」が、共鳴行動として子どもに浸透し、子どもが養育者と同じ力動的状態に導かれるという先取的な役割を果たすとしている。井手 (2015) は、これをミラーリングと同義とした。

Legerstee and Varghese (2001) は、母親のミラーリングを、attention maintenance (注意維持), warm sensitivity (あたたかい感受性), social responsiveness (社会的応答) の特徴を持つ関わり状態と定義し、3ヶ月齢児の応答的な母親を認知する能力に、母親のミラーリング頻度が関係していることを明らかにした。さらに、Legerstee, Fisher, and Markova (2005) は、ミラーリングの頻度が、言語獲得の前段階である共同注意の発達に影響を与えることを示した。

その一方で、言語発達促進の効果的なアプローチと

して、臨床現場では、子どもの注意の方向を敏感に読み取っての言葉かけ (Siller & Sigman, 2002) や、子どもの注意関心を引き付ける効果としての模倣 (Nadel, Croue, Mattlinger, Canet, Hudelot, Lecuyer, & Martini, 2000; Field, Field, Sanders, & Nadel, 2001, 他) が注目され、自閉症児への研究 (浦島・伊藤, 2008; Tigerman & Primavera, 1981, 他) が行われている。

言語発達の遅れを持つ子どもの母親に対しては、経験的に、子どもの行動を実況中継するように映し返すことが指導され、事例報告もされている (荻原, 1995)。それらをふまえ、井手 (2010) は、保健センターの健康診査事後教室へ通う、言語発達に遅れのある子どもを持つ母親に対して、実況中継するような関わりを指導し、実際に言語発達が促進された事例を示した。

このように、母親のミラーリングが言語発達を促進する介入の手段となる可能性が示唆される一方で、実証研究は少なく、定義もあいまいななかで、経験的な指導が行われているのが現状である。

そこで井手 (2014, 2016) は、Legerstee and Varghese (2001) の定義に準拠し、ミラーリングを「実況」「代弁」「注意」「模倣」と具体的な行動レベルに再定義し、言語発達との関連を検討した。その結果、3ヶ月齢児において「実況」「代弁」の頻度が高いほど「人へ声をあげる」発現時期が早く、24ヶ月齢児において、「注意」の頻度が高いほど「心配行動」「いたわり行動」の発現時期が早いことが示された。それに反し、18ヶ月齢においては、「注意」「実況」「代弁」の頻度が高いほど、「母親の要求に子どもが返答する」「共同注意」の発現時期が遅いという特徴が示された。このことから、ミラーリングの頻度は、乳幼児の共同注意の発現時期に影響があることが示唆された。

以上のように、母親のミラーリングは、共同注意を含む言語発達を促進するための介入の手段となることが示唆されたが、実際に、言語発達促進のためのプログラムを作成するとしたら、どのように役立てることができるだろうか。

1) 名古屋大学大学院教育発達科学研究科博士課程 (後期課程) (指導教員: 氏家達夫教授)

Kaye (1982) は、親子関係は、母親の行動の個人差の連続性が大きく、子どもの生後1年の行動から後の能力を言えるとしても、それは親の変数からであるとしている。すなわち、母親の個人差は大きく、乳幼児との関係性において主導権を持つのは母親であるということから、母親の関わり方への教育、指導プログラムは、有意義なものと言える。

前述した荻原 (1995) や井手 (2010) は、ミラーリングの一部である実況中継的な関わりを指導し、その結果子どもの言語が増加した。この場合、指導する側は、母親面接や、母親の不安や質問に答える時に、アドバイスの方法論として伝えており、いずれも母親の積極的な援助を求める行動に答える場面での指導であったため、子どもへの関わりを積極的に行う動機が高かった場合の子どもの変化ともいえる。

しかし、ミラーリングは、子どもの言語発達を促す動機づけの少ない母親や、声かけをどのようにしたらよいかかわらずに不安が募るだけの母親等、本来のミラーリングが少ない母親たちこそ、有効に活用されるべきものであり、そのような動機の低い母親たちにも参加しやすいようなプログラムを提唱することが理想である。

そこで、プログラム作成にあたって、行いやすさ (簡潔性)、行う期間、行う子どもの月年齢を検討した。行いやすさについては、まずは、「ミラーリング」とはどのようなものかを説明した。例えば鯨岡 (1997, 1999a) の口を開けてほしいときに一緒に口を開ける行動をしてしまう母親の成り込みの例を、「模倣」の説明において、「離乳食を食べさせるときに思わず口を一緒に開けてしまうようなこと」と伝えた。そして、いつも行っているものであることを母親に知らせ、それを少し意識して行ってほしいという言い回しとした。行う期間は、無理なく、しかし忘れずに継続できる時期の1週間とした。

1週間後に、母親のフォローアップを兼ね、感想インタビュー (半構造面接) をあらかじめ約束し、「実際に意識してみてもうどうだったか感想を聞かせてほしい」という問いかけを行った。

また、月年齢については、黒木・大神 (2003) において共同注意行動の発達時期が、1歳前後から2歳前後までであることを踏まえ、9ヶ月から3歳7ヶ月 (2歳児) までとした。

これらの試みによって、本論では、母親の面接内容を分析し、実際に母親のミラーリングが促進されるかどうか、子どもと母親自身に、何らかの変化を感じることがあったかどうかを含め、また、それらの変化について、発達の違いがあるかどうかを検討し、言語発達等の具体的な効果の相違を明らかにすることを目的とする。そ

して、そこから得られた情報を、プログラム構築の手立としてとしたい。

方法

調査協力者

保健センターの定期健診、児童館に來所した9か月から2歳児の子どもを持つ保護者 (母親) 79名である。

調査期間

2015年10月から2016年2月までである。

調査手続き

保健センターでの定期健診、児童館等で、協力を得られた上記の保護者 (母親) に、「実況」「代弁」「注意」「模倣」の説明をし、「いつも行っていると思うが、これら4つの関わりを、1週間だけ、少し意識して、お母さんが行いやすい時間と場面で、無理なく行ってもらいたい」と教示し、その前にミラーリング頻度と言語・共同注意発達を問う質問紙 (井手 (2014, 2016)) を書いてもらうよう依頼した。

そして、1週間後にインタビュー (半構造面接) を行い、全体的な感想、ミラーリングの増加の有無、子どもの反応、子どもの変化の有無と内容、母親自身の変化の有無と内容等を聞いた。質問の項目はTable 1に示した。

Table 1. ミラーリングプログラムの感想インタビュー内容項目

1	ミラーリングを行ってどうだったかの感想
2	ミラーリングは増えたか、変わらないか
3	ミラーリングの4つの関わりのうち、重点的に行った行動
4	ミラーリングを行った場面
5	ミラーリングに対して子どもの反応はどうだったか
6	子どもの変化はあったと思うか
6-a	あったと答えた人に対して どんな変化かの内容
6-b	なかったと答えた人に対して 理由を問う
7	母親自身の変化はあったと思うか
7-a	あったと答えた人に対して どんな変化かの内容
7-b	なかったと答えた人に対して 理由を問う
8	言語発達は、このプログラムで促されると思うか

分析

1. 発達の群分け

以下のような群分けを行った。人数分布はTable 2に示す。

- ①1歳前半群—10ヶ月～1歳3ヶ月齢児の母親。
- ②1歳後半群—1歳4ヶ月～1歳11ヶ月齢児の母親。
- ③2歳群—2歳0ヶ月～2歳11ヶ月齢児の母親。

④3歳群－3歳0ヶ月～3歳7ヶ月齢児の母親。

Table 2. 群と性別の人数

群	性 別		合計
	男児	女児	
1歳前半群	9	8	17
1歳後半群	16	9	25
2歳群	13	12	25
3歳群	7	5	12
合計	45	34	79

2. 半構造面接の内容分析

半構造面接で得られた、子どもの反応、変化、母親自身の変化別の内容を分類してその項目の言及数を算出した。

3. プログラム後の変化の検討（カイ二乗検定）

プログラム後の子どもの変化、母親自身の変化の有無と言及内容について、偏りを検討するため、カイ二乗検定を行った。子どもの反応、変化、母親自身の変化等の、言及内容の発達の偏りを検討するため、カイ二乗検定の残差分析を行った。

4. 発達との関連性

発達群の偏りを検討するため、子どもの反応、変化、母親の変化の言及内容について、カイ二乗検定と残差分析を行った。

結果

全体的な検討

ミラーリングの増加

「ミラーリングは増えましたか？」という問いに、「とても増えた（増加大）」と答えた母親は5名（6%）、「増えた（増加）」と答えた母親は48名（61%）、「少し増えた（増加少）」と答えた母親は12名（15%）、「増えなかった（増加なし）」と答えた母親は14名（18%）であった。

子どもの変化・母親の変化

①子どもの変化と②母親の変化について、偏りを検討するため、以下のようにカイ二乗検定を行った。（ ）内は、その後の名称である。

①子どもの変化

「おさんは変化しましたか？」の問いに、即座に「変化した（子ども変化あり）」と答えた母親は47名（59%）、「よくわからない（子ども変化不明）」と答えた母親は15名（19%）、「特に変わらない（子ども変化なし）」と答えた母親は17名（22%）であった。カイ二乗検定をした結果、「子ども変化あり」の母親が「子ども変化不明」、「子ども変化なし」の母親に比して、有意に多かった

（ $\chi^2(2) = 24.41, p < .01$ ）。「子ども変化不明」の母親15名と、「子ども変化なし」と答えた母親17名のうち、9名は、その後、変化があったと述べ、8名は、変化なしのままであった。

②母親の変化

「おさん自身は何か変化がありましたか？」の問いに、即座に「変化した（母変化あり）」と答えたのは75名（95%）、「変化しない（母変化なし）」と答えたのは4名（5%）であった。カイ二乗検定した結果、「母変化あり」が「母変化なし」に比して、有意に多かった（ $\chi^2(1) = 63.81, p < .01$ ）。「母変化なし」の母親4名中2名が、その後、変化を語った。以上の①と②の結果を、Table 3に示す。

Table 3. 子どもの変化、母親の変化の人数偏り

（ ）内は%

子どもの変化			母親の変化		
	n	残差		n	残差
変化 あり	47 (59)	20.7	変化 あり	75 (95)	35.5
変化 不明	15 (19)	-11.3	変化 なし	4 (5)	-35.5
変化 なし	17 (22)	-9.3			
$\chi^2(2) = 24.41, p < .01$ あり>不明、なし			$\chi^2(1) = 63.81, p < .01$ あり>なし		

子どもの反応・子どもの変化・母親の変化の内容

①子どもの反応の言及内容の偏り

「おさんの反応はいかがでしたか？」の問いに対し、「喜んだ（喜んだ）」という言及が多く、言及あり59名（75%）、言及なし20名（25%）で、カイ二乗検定を行った結果、有意な偏り（ $\chi^2(1) = 19.25, p < .01$ ）が示され、言及ありが有意に多かった。

「私のまねを見て子どもがまねした（まね）」は、言及38名（48%）、言及なし41名（52%）で、有意な偏りが示されなかった。

「理解された感じ、わかってもらったような表情（理解された感）」では、言及25名（32%）、言及なし54名（68%）（ $\chi^2(1) = 10.65, p < .01$ ）、「よく見る（見る）」では、言及20名（25%）、言及なし59名（75%）（ $\chi^2(1) = 19.25, p < .01$ ）、「もっとやって…となった（要求もっと）」は言及19名（24%）、言及なし60名（76%）（ $\chi^2(1) = 21.28, p < .01$ ）、「泣き止む（泣き止む）」は言及19名（24%）、言及なし60名（76%）（ $\chi^2(1) = 21.28, p < .01$ ）、「見て見て…（見て）」は言及16名（20%）、言及なし63名（80%）（ $\chi^2(1) = 27.96, p < .01$ ）で、有意な偏りが示され、言及なしが有意に多かった。これらの結果をTable 4へ示す。

②子どもの変化の言及内容の偏り

子どもの変化が語られた母親71名のうち、「言葉が増えた（言葉増加）」と言及した母親は46名（65%）、言及

Table 4. 子どもの反応の人数偏り

() 内は %

	喜んだ		まね		理解された感		見る		要求もつと		泣き止む		見て	
	n	残差	n	残差	n	残差	n	残差	n	残差	n	残差	n	残差
言及あり	59 (75)	19.5	38 (48)	-1.50	25 (32)	-14.5	20 (25)	-19.5	19 (24)	-20.5	19 (24)	-20.5	16 (20)	-23.5
言及なし	20 (25)	-19.5	41 (52)	1.50	54 (68)	14.5	59 (75)	19.5	60 (76)	20.5	60 (76)	20.5	63 (80)	23.5
カイ二乗	19.25**		.11		10.65**		19.25**		21.28**		21.28**		27.96**	
自由度	1		1		1		1		1		1		1	

** $p < .01$ * $p < .05$

Table 5. 子どもの変化の人数偏り

() 内は %

	言葉増加		交流増加		情緒安定		自律行動		理解増加		要求増加		活発		まね増加		指差し増加		興味の広がり		いたわり行動増加	
	n	残差	n	残差	n	残差	n	残差	n	残差	n	残差	n	残差	n	残差	n	残差	n	残差	n	残差
言及あり	46 (65)	10.5	36 (51)	.5	31 (44)	-4.50	27 (38)	-8.5	17 (24)	-18.5	13 (18)	-22.5	11 (15)	-24.5	8 (11)	-27.5	7 (10)	-28.5	7 (10)	-28.5	3 (4)	-32.5
言及なし	25 (35)	-10.5	35 (49)	-5	40 (56)	4.50	44 (62)	8.5	54 (76)	18.5	58 (82)	22.5	60 (85)	24.5	63 (89)	27.5	64 (90)	28.5	64 (90)	28.5	68 (96)	32.5
カイ二乗	6.21*		.14		1.14		4.07*		19.28**		28.52**		33.82**		42.61**		45.76**		45.76**		59.51**	
自由度	1		1		1		1		1		1		1		1		1		1		1	

** $p < .01$ * $p < .05$

Table 6. 母親の変化の人数偏り

() 内は %

	見ること意識化		気づき		母関わり増加		母情緒安定		反省		確認安心		子ども目線		手段広がり	
	n	残差	n	残差	n	残差	n	残差	n	残差	n	残差	n	残差	n	残差
言及あり	58 (75)	19.5	50 (65)	11.5	39 (51)	.5	34 (44)	-4.5	31 (40)	-7.5	20 (26)	-18.5	19 (25)	-19.5	11 (14)	-27.5
言及なし	19 (25)	-19.5	27 (35)	-11.5	38 (49)	-5	43 (56)	4.5	46 (60)	7.5	57 (74)	18.5	58 (75)	19.5	66 (86)	27.5
カイ二乗	19.75**		6.87**		.01		1.05		2.92 †		17.78**		19.75**		39.29**	
自由度	1		1		1		1		1		1		1		1	

** $p < .01$ * $p < .05$

なしの母親は25名 (35%) であった。カイ二乗検定した結果 ($\chi^2(1) = 6.21, p < .05$) , 「言葉増加」を言及した母親が有意に多かった。

また、「子どもからの交流が増えた (交流増)」は、言及あり35名 (51%) , 言及なし36名 (49%) , 「イヤイヤの行動の収束が早くなって情緒が安定した (情緒安定)」が言及31名 (44%) , 言及なし40名 (56%) でカイ二乗検定した結果、有意な偏りはなかった。

さらに、「自分でできることが増えた (自律行動)」は、言及27名 (38%) , 言及なし44名 (62%) ($\chi^2(1) = 4.07, p < .05$) , 「理解できることが増えた (理解増加)」は、言及17名 (24%) , 言及なし54名 (76%) ($\chi^2(1) = 19.28, p < .01$) , 「要求が増加した (要求増加)」は、言及13名 (18%) , 言及なし58名 (82%) ($\chi^2(1) = 28.52, p < .01$) , 「活発になった (活発)」は、言及11名 (15%) , 言及なし60名 (85%) ($\chi^2(1) = 33.82, p < .01$) , 「まねが増えた (まね増加)」は、言及8名 (11%) , 言及なし63名 (89%) ($\chi^2(1) = 42.61, p < .01$) , 「指差しが増えた (指差し増加)」は、言及7名 (10%) , 言及なし64名 (90%) ($\chi^2(1) = 45.76, p < .01$) , 「興味関心が広がった (興味の

広がり)」は、言及7名 (10%) , 言及なし64名 (90%) ($\chi^2(1) = 45.76, p < .01$) , 「いたわり行動が増えた (いたわり行動増加)」は、言及3名 (4%) , 言及なし68名 (96%) ($\chi^2(1) = 59.51, p < .01$) で有意な偏りが示され、言及なしが有意に多かった。これらの結果をTable 5に示す。

③母親の変化の言及内容の偏り

「お母さん自身は何か変化がありましたか」の問いに対し、変化が語られた母親77名のうち、「子どもをよく見るようになった。」「意識して関わるようになった」(見ること・意識化)と言及したのは58名 (75%) , 言及なしが19名 (25%) ($\chi^2(1) = 19.75, p < .01$) , 「いろいろなことに気づくことが多かった (気づき) (子どもがこんなことができる、私の日頃の関わりでいいみたい等)」の言及が50名 (65%) , 言及なしが27名 (35%) ($\chi^2(1) = 6.87, p < .01$) で、有意な偏りが示され、言及した母親が有意に多かった。

また、「関わりが増えた (母関わり増加)」(言及39名 (51%) , 言及なし38名 (49%)) , 「嬉しくなった、あまり怒らず穏やかになった (母情緒安定)」(言及34名 (44%) , 言及なし43名 (56%)) , 「片手間の子育てを反省(反

Table 7. 子ども変化と母親変化の発達的な偏り

変化 / 反応 / 群			1歳前半群	1歳後半群	2歳群	3歳群	計	χ^2	p値
子ども変化 情緒安定	言及あり	実際度数 (%)	2 (14.30)*▽	9 (40.90)	14 (60.90)*▲	6 (50.00)	40 (56.30)	7.94	.05
		残差	-2.48	-.31	2.02	-.49			
	言及なし	実際度数	12 (85.70)*▲	13 (59.10)	9 (39.10)*▽	6 (50.00)	31 (43.70)		
		残差	2.48	.31	-2.02	.49			
	興味・広がり	実際度数 (%)	1 (7.10)	5 (22.70) †▲	1 (4.30)	0 (0)	7 (9.90)		
		残差	-.38	2.44	-1.08	-1.26			
いたわり行動 の増加	言及あり	実際度数 (%)	0 (0)	0 (0)	3 (13.00) †▲	0 (0)	3 (4.20)	6.54	.10
		残差	-.88	-1.19	2.56	-.80			
	言及なし	実際度数	14 (100)	22 (100)	20 (87.00) †▽	12 (100)	68 (95.80)		
		残差	.88	1.19	-2.56	.80			
	母親変化 反省	実際度数 (%)	7 (41.20)	5 (20.80) †▽	14 (56.00) †▲	5 (45.50)	31 (40.30)		
		残差	.09	-2.34	1.95	.38			
母親変化 反省	言及なし	実際度数	10 (58.80)	19 (79.20) †▲	11 (44.00) †▽	6 (54.50)	46 (59.70)	6.47	.10
		残差	-.09	2.34	-1.95	-.38			

▲有意に多い ▽有意に少ない * $p < .05$ † $p < .10$

省)」(言及31名(40%),言及なし46名(60%))は、有意な偏りが示されなかった。

さらに、「いつもやっている関わりが不安だったが、これでいいんだと安心した(確認安心)」は、言及20名(26%),言及なし57名(74%)($\chi^2(1) = 17.78, p < .01$)、「子ども目線になる等、関わりが変わった(子ども目線)」は言及19名(25%),言及なし58名(75%)($\chi^2(1) = 19.75, p < .01$)、「イヤイヤと泣いた時の関わりに利用し、子ども関わりの手段が広がった(手段広がり)」は、言及11名(14%),言及なし66名(86%)($\chi^2(1) = 39.29, p < .01$)で、有意な偏りが示され、言及なしが有意に多かった。これらの結果をTable 6に示す。

発達的な差の検討

上記の内容について、発達的な偏りについて検討するため、発達群間で、言及ありと言及なし(4群×2項目)の残差分析を行った。

①子どもの反応の発達的な偏り

子どもの反応については、発達群の間に有意な偏りは示されなかった。

②子ども変化の発達的な偏り

「情緒安定」($\chi^2(3) = 7.94, p < .05$)で、2歳群の言及が有意に多く、1歳前半群の言及が有意に少なかった。また、「いたわり行動増加」($\chi^2(3) = 6.54, p < .10$)は、2歳群の言及が有意に多い傾向が、「興味広がり」($\chi^2(3) = 6.31, p < .10$)では、1歳後半群の言及が有意に多い傾向が示された。

③母親の変化の発達的な偏り

「反省」($\chi^2(3) = 6.47, p < .10$)の言及で、2歳群が有意に多い傾向、1歳後半群が有意に少ない傾向が示された。以上の①から③の結果をTable 7に示す。

事例検討

上記の結果は、内容や言い回しが子どもの月年齢によって多少の相違を示した。全体的には、言葉の増加が語られた。1歳前半群の母親は、反応のやりとりとその楽しさの内容、1歳後半群は、意識の変化、2歳群では、子どもの成長に気づく内容、3歳群では、子どもの行動変化を語った。それぞれの月年齢で語った内容をTable 8に示す。()内に月年齢群を示した。

考察

母親のミラーリング増加について

母親たちは、全体の82%が、何らかの形で増加したと言及した(増加大(5名),増加(48名),増加少(12名))。研究に参加し、教示を受けた場合、行動変化が現れることは自然であるが、事例Table 8に示したように「意識した」結果、増えたという言葉が多かったことから、「少し意識して下さい」という教示が、そのまま増加を促したと考えられる。加えて、子どもの反応の質問に対して「喜んだ」の言及が有意に多かったこと、母親の事例では「まねすると、子どもの反応が返ってきてうれしくてたくさんやった。」「子どもも私の行動をまねし、さらに私がまねしてやりとり遊びとなり、楽しかったので、またやろうという気持ちとなった」という言及が見られたことから、ミラーリングの増加は、母親の意志とともに

Table 8. 具体的な感想の内容

() 内は月年齢群

ミラーリングの増加について	子どもの反応	子どもの変化	母親の変化
<ul style="list-style-type: none"> ・増えた。(全) ・意識して増えた。(1前) ・今までもやっていたけど増えた。(1前) ・普段やってないなと思った。(1後) ・家事をしながら関わっていたが、手を止めて関わった。(2) 	<ul style="list-style-type: none"> ・うれしそう。(全) ・わかってもらえた感。(全) ・ぐずりそうになっても泣かない。(1前) ・私のまねに、まねして、私がまねて、やりとり遊びに発展し、際限なかった。(1後・2) ・楽しい(途中でやめた)。(1後・2) ・びっくりすることがあった。ご飯を食べながらふざけていて、私がまねたらそのまま止まった。反応を見てきた!と思った。(1後) ・イヤイヤと言った(泣いた)ので、まねしたら、急にニコリした。(1後) ・かんしゃくの機嫌が直る(3) ・すごく喜び、私に見てと言ってきた。下の子が生まれ、一人で遊ぶことが増えたが、本当は我慢していたのだと思った。(3) ・おもしろがり、「私のやることやって」と再度要求した。(3) 	<ul style="list-style-type: none"> ・気のせいかもしれないけど言葉が増えた。(1前・1後・2) ・言葉が出る時期とちょうど重なったのかもしれないけど、言葉が増えた。(1前・1後・2) ・一週間で急に2語文(言葉の数)が増えた。(2) ・まね(指さし)が増えた。(1前) ・声をかけてほしそうにアピールする。(1前・1後・2) ・よく見る。(1前) ・見て見て…と指さし(1後・2) ・子どもから関わってくる。見ているかを確認する。(1後) ・関わりが増えた(1後) ・私がまねた言葉をまねすることが増えた。(1後) ・イヤイヤ期が始まった。(1後) ・共有が増えた。 ・関わってくれると思ったのか反応が増えた。(1後) ・呼びかけが多くなった。(2) ・苦手なことを率先してやるようになった。(2) ・指しゃぶりをまねしたら、笑ってすなりやめた。(2) 	<ul style="list-style-type: none"> ・教えてもらわないとわからなかった。(1前) ・嬉しい。楽しくなった。(1前・1後) ・もっと話すようになった。 ・方法がわかり、イライラが減った。(1前・1後) ・私の変化が大きいかも。(全) ・「いつもやっている関わり」をするということで、ああいつもやっている…これね…と思った。その後の子どもの反応が楽しくなり、自分の子育てに自信がついた。(1前・1後) ・今起きていることを口にするので…冷静になれる。(1前・1後・2) ・よく見る。(1前) ・今どんな気持ちか考える。(1後) ・いつもやっていることを確認し安心した。(全) ・いろいろ気づいた。(全) 代弁は苦手だなとか…(1) ・こんなことができるんだ(1) ・聞いているんだな…(1後) ・私をよく見てる(2) ・意志をはっきり言うようになったのだな…(2) ・黙々とした育児が減った。(1後) ・イヤイヤに付き合うのがしんどかったが、気持ちよく事が済むと思った。(2) ・声かけのポイントが参考に。(2) ・片手間育児(2人め)の見直し。(2・3)

に、子どもの反応に影響される側面があると推測される。

鯨岡(1999b)は、3ヶ月過ぎの乳児が、母親のあやしかけに応じて示す微笑み場面を円環図で示し、母親があやすことで乳児が微笑み、それを見た母親が嬉しがっていると感じてそれを嬉しく思いながら同時に可愛いと感じ、それを見た乳児が微笑む「あやす/微笑む(乳児)―嬉しい(乳児)/可愛い(母親)―微笑む(乳児)/あやす(母親)」という映し合いが、情動共有関係を構築し、やがて母親の子育ての自信感になり代わると述べている。本調査の母親たちにおいても、ミラーリングによっ

て子どもが笑って喜ぶ姿を見ることで、3ヶ月ごろに感じた映し合いの感覚が呼び起こされ、情動共有関係が活性化し、子どもの反応や変化を見てさらに動機づけが高まり、行動が増加するということが生じていた可能性が考えられる。

ただし、本研究における母親のミラーリングの増加は、インタビューによる主観的な言及であるため、今後は、客観的な変化指標の開発により、両面からの検討が必要となると考える。

ミラーリングの効果について

全体的な効果

上記のように、子どもの反応を見た母親が、さらにミラーリングを行うという母子の映しあいが相互的に起きていたとすると、ミラーリングは、一方的な母親の行為でなく、意識することによって、母子の間にこのような情動共有の相互交流を促進させる効果を持つと考えられる。

子どもの変化

子どもの変化で有意に多かったのは、「言葉増加」であった。意識的なミラーリングによって、母親たちは、「2語文が出た」、「言葉が出る時期とちょうど重なったのかもしれないけど、単語が増えた」と言葉の増加に関する変化を述べた。年齢群による人数の偏りは認められなかったため、言葉の増加は各年齢に共通の変化であったと言える。小椋（2015）は、共同注意の成立が言語獲得の基盤となり、日常場面の大人のことばかけには、常に共同注意が潜在していることから、共同注意状況下での大人の言語は子どもの言語発達を容易にしている。井手（2016）では、24ヶ月齢児の母親のミラーリング頻度の高さが、共同注意の発現時期を早くしていたことが示されたが、本結果でも子どもの変化のひとつに「いたわり行動増加」を述べた母親が3名おり、この時期の母親が子どもの成長を感じられる特徴的な現象ともいえ、ミラーリングが共同注意の発達や、言語発達を促進する可能性は、本研究においても示唆された。

子どもの変化の内容について、発達的な特徴が示されたのは、「情緒安定」に関してであり、1歳前半群では言及が有意に少なく、2歳群の母親の言及が有意に多かった。内容の詳細は、「イヤイヤのぐずり行動の収束が早くなった」と述べるなど、第1次反抗期の発達的な特徴に関連した言及であった。その理由として、「代弁で、わかってもらえた感じになったからでは?」「いつもはどうしたらいいかわからず放っておいたけど、まねしてみたらこちらを見て泣きやみ、笑った。かまってもらえたから泣き止んだかもしれない」など、いつもと違う関わりに、子どもが反応したと述べた。これらの母親は、子どもの困った行動に対してミラーリングを取り入れて工夫した結果、「そういえばあまり泣かなくなった」等、子どもが変化したようだ。

また、前述した「いたわり行動増加」は、2歳群の母親3名が言及し、他の月年齢群には見られず発達的な偏りに有意な傾向が示された。この行動は、黒木・大神（2003）の共同注意の発達指標に含まれ、他者理解が発達する14か月から24か月頃に発達するとされているように2歳群特有の行動であり、井手（2016）においても、

24か月齢のミラーリング頻度の高さが「いたわり行動」の発現時期を早めるという結果が示されていることから、ミラーリングの増加と「いたわり行動増加」の関係が、本結果においても先行研究と同様の意味を持つ可能性が示唆されたといえよう。

母親の変化

母親の変化に関する言及では、「見ること、意識化」、「気づき」が有意に多かった。これは、ミラーリングすることによって、子どもをよく見た結果、子どもの様子やできること（発達）に気づいたと同時に、母親自身の日常的な関わり方を振り返る等、客観的な視点が得られたと考えられる。そして、それが、2歳群の有意に多い傾向である「反省」につながったものと考えられる。

ミラーリングは、子どもを見ながら行う行動であり、ミラーリングが増えるということは、子どもの様子を見ることが増えることと同義である。よって、ミラーリングすることで同時に自然発生する「よく見る」行動が、子どもの反応や、変化を感じることができ「気づき」や、「確認安心」「反省」の前提となっており、結果的に母親の変化をもたらしたと思われる。これらの変化は、前述の情動共有の効果と加えて、主要な効果と考えられる。

また、母親自身の確認作業が自信を生じさせたのは、これでいいのだという安心感が喚起されたからであり、それがTable 8の「いつもやっている関わり」をすることで、ああいつもやっている…これね…と思った。その後の子どもの反応が楽しくなり、自分の子育てに自信がついた」、「こういう関わりをすればいいとわかったので、安心した。」の発言に反映されている。

以上から、ミラーリングを行うことによってもたらされる母親側の効果は、子どもをよく見るようになることや、気づきを得る等の育児の側面と、母親自身の育児の確認、関わりの学びから得た安心感と自信という、母親自身の側面も持つと考えられ、このことから、母親支援の一方法としての可能性も示唆された。

まとめと今後の課題

以上のように、ミラーリングプログラムに参加した母親からの感想を分析した結果、ミラーリングが増加し、子どもと母親の変化を感じたと述べた母親が有意に多かった。全体的な子どもの反応は、「喜んだ」、子どもの変化は、「言葉増加」、母親の変化は、「見ること・意識化（子どもを意識してよく見るようになった）」、「気づき」が有意に多かった。発達的な偏りに関しては、子どもの変化において、「情緒安定」「いたわり行動増加」が、2歳群の母親で他の月年齢群に比して多く語られる傾向があり、「興味の広がり」が、1歳後半群の母親で他の月

年齢群に比して多く語られる傾向が示された。また、母親の変化については「反省」が、2歳群の母親に言及が多く、1歳後半群の母親で言及が少ない傾向が示された。

以上の結果から、母親のミラーリング頻度の増加は、関係性を活性化させ、その結果、言語発達を促すことが示唆された。それに伴い、母親の意識の変化や、育児の確認、参考（関わりの学び）、安心感をもたらす等の機能を持ち、母親支援の可能性も示唆された。

今後の課題として、本プログラムにおいて、ミラーリングの増加の程度が語られたことから、増加程度が大きいと言及した母親5名、増加が少なかったと言及した母親12名の同異を探ること、また、増えなかったと述べた14名の母親について、特徴を詳細に分析する必要がある。これらの母親について、何らかの特徴を探ること、プログラムの問題点や、ミラーリング増加のメカニズムを明らかにすることができ、より取り組みやすいプログラムを構築する手立てとなると考える。

また、本研究は、自覚的な母親の言及の結果得られた知見を示したものであり、今後はそれらの客観的な指標の裏づけが望まれる。よって、今後は、統制群との比較検証に、今回得られた変化の内容を質問紙に組み込み、さらに検討することが必要となる。変化の詳細について、統制群との差が示されれば、ミラーリングプログラムの有効性を証明できると考える。

引用文献

- Field, T., Field, T., Sanders, C., & Nadel, J. (2001). Children with autism display more social behaviors after repeated imitation sessions. *Autism*, 5, 317-323.
- 井手裕子 (2010). 保健所における母親の心理危機状況への介入に関する一考察—言葉遅れを主訴として来所した母子の事例を通して— 金城学院大学心理臨床相談室紀要, 10, 3-11.
- 井手裕子 (2014). 母親の乳幼児に対するミラーリングの横断的検討 日本教育心理学会第56回総会発表論文集, 831.
- 井手裕子 (2015). ミラーリング研究の現状と課題—言語発達への介入としてミラーリングが持つ機能— 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要, 62, 57-65.
- 井手裕子 (2016). 母親の乳幼児に対するミラーリングと言語発達との関連について 小児保健研究, 75, 445-452.
- Kaye, K. (1982). *The Mental and Social Life of Babies*: The University of Chicago, Illinois, USA.
- (ケイ, K. 著, 鯨岡峻・鯨岡和子訳 (1993). 第3章「母子システム」 親はどのようにして赤ちゃんをひとりの人間にするか (pp.38-70) ミネルヴァ書房)
- 鯨岡俊 (1997). 第2章 関わり合う二者 原初的コミュニケーションの諸相 (pp.83-128) ミネルヴァ書房
- 鯨岡俊 (1999a). 第2章「共にある」あり方の多様性: 子どもの成長と養育者の調整的関与 関係発達論の展開 間主観的アプローチによる (pp.145-250) ミネルヴァ書房
- 鯨岡俊 (1999b). 第1章誕生前から初期の一体的関係が成立するまで 関係発達論の展開 初期「子ども—養育者」関係の発達の変容 (pp.47-144) ミネルヴァ書房
- 黒木美紗・大神英裕 (2003). 共同注意行動尺度の標準化 九州大学心理学研究, 4, 203-213.
- Legerstee, M., Fisher, T., & Markova, G. (2005). The development of attention during dyadic and triadic interactions: *The role of affect attunement*. Paper presented at 35th Annual Meeting of the Jean Piaget Society, Vancouver, Canada, June, 2005. In *Infant's Sense of People Precursors to a Theory of Mind*, Press of the University of Cambridge, England.
- (レゲアスティ, M. 著, 大藪泰訳 (2014). 乳児の対人感覚の発達 (pp.187-206) 新曜社)
- Legerstee, M., & Varghese, J. (2001). The role of affect mirroring on social expectancies in three-month-old infants. *Child Development*, 72, 1301-1313.
- Nadel, J., Croue, S., Mattinger, M.J., Canet, P., Hudelot, C., Lecuyer, C., & Martini, M. (2000). Do children with autism have expectancies about the social behavior of unfamiliar people? *Autism*, 4, 133-145.
- 荻原はるみ (1995). 言語発達遅滞児への早期指導と発達過程 筑波大学発達臨床心理学研究, 7, 1-12.
- 小椋たみ子 (2015). 第4章 養育者はどんな語りかけをしているか? 小椋たみ子・小山正・水野久美著 乳幼児期のことばの発達とその遅れ 保育・発達を学ぶ人のための基礎知識 (pp.91-100) ミネルヴァ書房
- Siller, M., & Sigman, M. (2002). The Behaviors of Parents of Children with Autism Predict the Subsequent Development of Their Children's Communication. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 32, 77-89.
- Stern, D.N. (1985). *The Interpersonal World of the Infant: A View from Psychoanalysis and Developmental Psychology*. Basic Books, Inc.

- (スターン, D.N. 著, 小此木啓吾・丸田俊彦監訳, 神庭靖子・神庭重信訳 (1989). 乳児の対人世界 岩崎学術出版社)
- Tigerman, E., & Primavera, L. (1981). Object manipulation : An interactional strategy with autistic children. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 11, 427-438.
- 浦島裕美・伊藤良子 (2008). 広汎性発達障害児における模倣認知と共同注意の発達の連関 東京学芸大学紀要, 総合教育科学系, 59, 461-473.
- (2016年8月26日受稿)

ABSTRACT

An attempt at mirroring program and developmental change in the mothers and their infants: Effects of the mirroring program read from the mothers' description from the interview

Yuko IDE

The aim of this study is to consider the effects of the mirroring program on mothers and their infants.

The definition of the mirroring is becoming synchronized with emotional conditions of infants and reflecting them like a mirror. It is considered to serve an important role in encouraging infants to increase their self-awareness, offering functions of giving feedback, controlling emotions, maintaining communication, and sharing feelings. During the language development period, imitation by their mothers would enhance the infants' understanding of the language their mothers use and nurturing their socialites.

On the basis of precedence knowledge, the program of maternal affect mirroring was created and carried out.

The subjects were 79 mothers whose infants were from 10-month-old to three-year-old, who visited childcare centers with their infants.

In the program, the mothers were instructed to try affect mirroring (commentary, representation, attention, and imitation) with their infants for one week, and then the mothers were interviewed whether the frequencies of their mirroring actions were increasing, some changes in their infants and mothers themselves. In addition, they were asked how their infants react and the content of the changes.

The significant results by χ^2 -square statistic were shown below. 82% of the mothers said the number of the mirroring actions was increased, 59% of the mothers said that they saw some changes in their infants, and 95% of the mothers said that they saw some changes in themselves.

With respect to the infants' reaction, mothers who responded that their infants were willing to participate in the mirroring actions were 75%. As to the changes, 65% of the mothers mentioned the number of their infants' vocabularies was expanded. Also 75% of the mothers remarked that they started to look at their infants more carefully, and 65% of the mothers said that they noticed some developmental changes in their infants, and reviewed their own child parenting style.

In the conclusion, the effect of the mirroring program is considered to be the result from the maternal affect mirroring and their infants' response to it, which inspires the language development of the infants.

Key words: mirroring, mother and child relationship, language development, infant, effect of mirroring program